

◇ 国 語

国 4-1～国 4-18 まで 18 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「日本というのはどういう国か」と聞かれたとき、どういふ答えがありうるだろうか。

まずは地理的特徴である。日本は島国で、山が多くて平野が少ない国だ。イギリスや大陸ヨーロッパ北部の国々に旅行して長距離列車に乗るとわかるが、とにかく山がない。なだらかな平野が延々と続き、緑豊かな田園風景が視界に広がる。デンマークにいたっては、一番高いところでなんと一七〇メートルほどしかない。一方、日本はとでもこぼこした国だ。新幹線に乗ると、やたらとトンネルをくぐることになる。山と山のあいだの狭い平野に人々がひしめき合って暮らし、都心部では緑地も少ない。そのせいか、街なかの風景はどこかゴミゴミしている（他の国と比べて格段にゴミは落ちていないのだが）。

社会科学的には、土地や気候など、ある国の地理的な特徴は「個体特性」といわれる。「たいていのことでは変化しないその国の個性」といった意味である。国の民族構成や共通言語、宗教なども、アにはそれほど大きく変化しないので、個体特性として考えられることがある。個体特性は変化しない。あるいは変化しにくいいため、その国の特徴として頻繁にゲンキウ^Aされるのである。アメリカは国土が広く、多民族国家だ、といった描写もそうだろう。

これに対して、政治家や研究者が問題にするのは、むしろその国の変化する特性についてである。なぜかといえば、a 変わらないことについてあれこれ議論しても社会はよくなるからだ。では、変化する特性にはどういったものがあるだろうか。

経済発展の度合い、年齢別の人口構成、社会保障の充実度などはわかりやすい変化だ。都市化も各国が経験してきた大きな変化の一つである。一〇〇年前には、これほど多くの人々が都市に住むようになるとは考えられていなかっただろう。そして、つい三〇年ほど前の日本は他の先進国と比べて高齢者の少ない「若い」国であった。それが今や、先進国のなかでも突出した超高齢化社会に変わった。これほど急激に高齢化が進むことも、多くの人々にとって想定外だったかもしれない。

このように社会の変化には様々な側面があるが、現在の社会学者の多くは、「国のかたち」を大きく変えてきたおおもとの変化は「工業化」であると考えている。そこでごくごく短くだが、工業化を軸として現在の経済先進国が経験した社会変動を記述してみよう。現在の私たちにとっての「仕事と家族」の特徴を理解するためにも、ある程度長期の歴史を踏まえておくことは必

須である。

一八世紀のイギリスで始まった産業革命を機に各国で急速に工業化が進み、主にヨーロッパとアメリカで大規模な社会変動を引き起こすことになった。工業化といっても、すでに身近な場所から工場がなくなってしまう人たちは漠然とした印象しか持てないかもしれない。少なくとも初期において、工業化とは衣服の材料となる繊維、建造物の材料となる鉄鋼、機械や鉄道を動かすための燃料である石炭の生産が **イ** に増えていくことを指す。工業化は生産力の飛躍的な上昇をもたらすため、工業化が進むと社会全体の富は急激に増えていく。つまり、生活を豊かにする様々なモノや建築物がどんどん増えるのである。しかし、すべての人がこれで豊かな生活ができるようになったわけではない。

b 先行する工業国家（イギリスやフランス）において、工業化は市場の発達とともに進んだ。資金やモノ、サービスの取引の場である市場が整備されることは、工業化を強力に押し進める **ドゥイン** となった。特に企業家の資金源となった資本（株式）市場の役割は大きい。しかし他方で、富を平等にいきわたらせること、工業生産に付随する環境汚染を **ヨクセイ** すること、この二点については市場の得意とすることはなかった。

富の平等な分配と環境保護は現在でも、市場に任せておくとなかなか達成されない二つの社会的課題である。当時、特に目立っていたのはやはり経済格差だ。工業化の当初、人々の生活水準には著しい格差があった。工場やオフィスを所有して経営する資本家と、資本家に雇用され、工場で肉体労働に従事する労働者とのあいだに、極端な富の格差が生まれた。これが階級対立であり、この対立は一九世紀後半から二〇世紀における政治の基本的な枠組みでもあった。

工業化の初期において、労働者の多くは農村から都市へ家族単位で移住してきた人々か、 **ウ** に貧しい国から工業化の進んだ国に移住してきた人々であった。そして、工業化が他の国に先駆けて進展したイギリスでは、労働需要の増加にともなうて、一九世紀後半になると男性のみならず、多くの女性や子どもも工場で雇用されて働いていた。「共働き」といえば共働きなのだが、労働条件は多くの場合劣悪で、 **c** 余裕のある暮らしとはいえなかった。病氣や怪我をしても、失業しても、保障らしい保障は整備されていなかった。

その後、工業化の **オンケイ** が労働者にもある程度いき届くようになった。そのきっかけは国によって様々だ。労働者自身が労

働運動を組織して資本家・経営者に対抗し、協議や紛争を通じて賃金や労働条件についての権利を獲得していった面もあるが、特に戦前において「国を強くする」という目的のもと、政府が社会保障制度を充実させたこと、民主主義の成熟にもなつて政府を経由した富の再分配がなされるようになったことも大きい。特に第二次世界大戦後の経済成長を背景に、先進国は豊かさや平等の両方を追求し、一九六〇年代まではある程度それを実現できていた。

工業化は、直接に製品をつくる会社 d、工場で生産された大量の物資を流通したり販売したりするための会社を生み出し、会社はそういった業務に対応した数多くの「仕事」、特にオフィスワークをつくり出す。現在の日本では、工場で働く人よりも エ にオフィスで働く人のほうが多い。また社会保障制度の充実は、政府に雇用された人が増えるということの意味する。政府に雇用された人、つまり公務員の割合は、日本ではかなり少ないが（二〇〇八年時点で労働人口の七%程度）、高福祉で知られるスウェーデンでは四人に一人以上が公務員である。生産性が上がれば上がるほど、そして政府の役割が大きくなればなるほど、実際の生産の現場ではなく、オフィスでの事務作業あるいは対人サービスに携わる人の割合が増えることになった。

さて、工業化の結果、「仕事」は現在の私たちが想像するようなものになった。自宅を出て、電車やバスを乗り継いで職場、すなわち工場やオフィスに到着する。自分の仕事をこなし、時間になったら自宅に戻って休む。ハウシユウ^Eは金銭、つまり賃金である。この働き方のスタイルは、農家や自営業とはかなり異なっている。何しろ労働時間がある程度決められているし、職務内容もある程度は決められたものであり、勤務時間中は自由に行動することが難しくなる。

e、農家や自営業は、戦後においても先進国から消えてしまったわけではない。特に工業化が欧米と比べて遅かった日本では、戦後社会においても農業や自営業が健在であった。その後の高度経済成長期においても、政府の保護政策もあって、他の先進国と比べて日本には農業と自営業の層の厚みがあった。都市の自営業や小規模企業は、現在でも日本経済の少なくない部分を占めている。農業や自営業の世帯では、いわゆるサラリーマン世帯とは異なった働き方がなされている。たいていは職任が近接しており、サラリーマンに比べて仕事の時間を柔軟に自分で決められる余地が大きい。

では、工業化により家族あるいは家族生活はどのように変化したのだろうか。

農家あるいは自営業が **オ** だった時代には、家族のメンバーは基本的に何らかのかたちで「仕事」をしていた。金銭を得るための仕事と、そうではない仕事（家事労働）の境界線は、労働者世帯ほどはつきりとしなかった。また、ゆるやかな役割分担はあったが、誰がどの「職務」を行うのが明確に決まっていたわけではない。職務内容がはつきり決まっていなことを「無限定性」と呼べば、実はこの無限定性は日本企業での働き方の特徴でもある。

工業化にもなつて雇用された労働者が増え、家族のメンバーの多くが工場で働くようになると、家庭の生活レベルが落ちることになった。というのは、働く場所と住居が別の場所になり、家庭生活の時間が限られるからである。これに対して工場やオフィスを所有・経営する資本家は、工場からやや離れた環境の良い場所に住宅を構え、そこから男性（夫）のみが通勤し、女性（妻）が家政婦を雇用して家庭生活の質を維持するという生活スタイルを確立していった。

労働者階級の私生活の劣悪さは、人道主義的な労働運動家や組織されつつあった労働者の団体にとつても取り組むべき社会問題であったが、国全体の力を損ねてしまうおそれもあり、国のエリート層にとつても無視できない問題であった。こうして各国で工場法（現在の労働法を想像してもらってもいいだろう）が制定され、女性と子どもの工場での労働は制限されることになった。同時に、雇用された成人男性は、家族を扶養するに足る賃金水準（生活給）を経営者に要求するようになった。このようななかば人道的な配慮の結果として、女性が賃労働から排除されていくのである。「男は家から離れた職場で賃労働をし、女は家庭のことに責任を持つ」という性別分業体制が労働者階級にも徐々に広がってゆき、第二次世界大戦後にはそういった生活スタイルが各国で一般化することになった。

戦後、経済が順調に成長するなかで、労働者階級の生活レベルが徐々に上昇した。高い教育レベルを持ち、オフィスで働いて比較的余裕のある生活を送る労働者も増え、いわゆる中流の厚い層を形成した。そして戦後からしばらくは、先進国の女性の多くは専業主婦になった。国によって性別分業が最も進展した時期にはズレがあるし、また国内での社会階層による違いは無視できないものの、基本的に戦後の先進国は「男性稼ぎ手」夫婦が目立つ社会であった。

（筒井淳也『仕事と家族』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ゲンキユウ

- ① 試験にキユウダイする
- ② キユウコウを温める
- ③ キユウケイどおりの判決
- ④ 真相をキユウメイする
- ⑤ 汚職をキユウダンする

1

B ドウイン

- ① ドウコウの士が集う
- ② ドウアゲをして喜ぶ
- ③ 敵のドウセイを探る
- ④ ドウリにかなう
- ⑤ 寺のドウトウが見える

2

C ヨクセイ

- ① ヨクソウに水を張る
- ② ヨクトクに目がくらむ
- ③ 飛行機のビヨク
- ④ ヨクアツされた感情
- ⑤ ヨクジツの予定

3

D オンケイ

- ① ケイシキを重んじる
- ② ケイヤクを結ぶ
- ③ 記念品をケイヨされる
- ④ ケイリヤクをめぐらす
- ⑤ 天のケイジを受ける

4

E ホウシユウ

- ① 事件がシユウソクする
- ② シユウイツな答え
- ③ ひどいシユウキが漂う
- ④ 議論のオウシユウ
- ⑤ シユウモクの意見が一致する

5

問二 空欄「ア」・「イ」・「ウ」・「エ」・「オ」に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア	① 長期的 ④ 恒常的	② 発展的 ⑤ 恣意的	③ 短期的	6
イ	① 定期的 ④ 普遍的	② 爆発的 ⑤ 平均的	③ 日常的	7
ウ	① 絶対的 ④ 感覚的	② 悲観的 ⑤ 相対的	③ 優先的	8
エ	① 圧倒的 ④ 強制的	② 比較的 ⑤ 革新的	③ 飛躍的	9
オ	① 横断的 ④ 支配的	② 感情的 ⑤ 国際的	③ 結果的	10

問三 空欄

a

b

c

d

e

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

からそれぞれ一つずつ選べ。

a

- ①これから
- ④おいそれとは

- ②とはいうものの
- ⑤ともかく

- ③それでは

11

b

- ①少なくとも
- ④あるいは

- ②あらためて
- ⑤おそらくは

- ③すなわち

12

c

- ①控えめにも
- ④通俗的にも

- ②おおげさにも
- ⑤お世話にも

- ③お世辞にも

13

d

- ①らしからず
- ④みずから

- ②だけは
- ⑤のみならず

- ③ならでは

14

e

- ①たとえば
- ④まずは

- ②とはいえ
- ⑤およそ

- ③同じく

15

問四 傍線部（一）「すべての人がこれで楽で豊かな生活ができるようになったわけではない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

16

- ① 女性と子どもの工場での労働が制限されるようになり、家族全体の収入が減ってしまったから。
- ② 労働者自身が資本家・経営者に対抗せず、賃金や労働条件についての権利を獲得しようとしなかったから。
- ③ サラリーマンと農家や自営業とでは働き方に違いがあり、安定した収入や自由時間がどちらも確保できないから。
- ④ 企業家の資金源となった資本（株式）市場が、富を平等にいきわたらせることができなかったから。

問五 傍線部（二）「工業化により家族あるいは家族生活はどのように変化したのだろうか」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

17

- ① 農家や自営業でも誰がどの「職務」を行うかが明確となり、役割分担がはっきりと決まった。
- ② 性別で仕事の内容を分け、男性は家から離れた工場で働いて賃金を得、女性は家庭のことに責任を持つ専業主婦になった。
- ③ 日本では社会保障制度が充実し、政府に雇用される人、すなわち公務員が増え、家計が安定した。
- ④ 労働者が増え、家族のメンバーの多くが工場で働くようになり、家庭の生活レベルが上がった。

問六 本文の内容と主旨が異なるものはどれか。次の①～⑤から一つ選べ。

18

- ① 農村から都市へ家族単位で移住してきた人々や、貧しい国から移住してきた人々が工業化の初期の時代の働き手であった。
- ② 現在でも社会的課題となっている富の平等な分配と環境保護は、市場に任せたままではなかなか達成されることがない。
- ③ かつて日本は、他の先進国に比べて高齢者の少ない「若い」国であったが、現在では突出した超高齢化社会を迎えている。
- ④ 女性が賃労働から排除されていたのは、労働階級の私生活の劣悪さを改善する労働運動家や国のエリート層による人道的な配慮の結果である。
- ⑤ 農家や自営業は、戦後になると先進国から次々と消えていった。日本においてもそれは同様で、多くの人たちが都会の工場やオフィスで働くようになっていった。

問七 この文章に付ける題名として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

19

- ① 富の平等な分配
- ② 「個性特性」と社会の変化
- ③ 工業化と「国のかたち」
- ④ 労働運動のあゆみ
- ⑤ 変化する特性

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近、これからは電子書籍が紙の本を押しつけて、書籍の中心コア的なバイタイになるという話がありましたね。そのトピックについて、立て続けに「いったい紙の本はどうなるのでしょうか？」とあちこちのメディアから訊かれました。

僕は紙の本はなくならないと思います。というのは、Padで読んでも、面白さが「何か」足りない気がするからです。いったい何が足りないのでしょうか。いろいろ考えました。そのあと、友人と会ったときにも、彼からも同じことを訊かれました。「Padで本読んでる？ あれ、読めないだろう？」。その理由として彼が挙げたのは、僕が考えていたこととほとんど同じことでした。それは本の厚みがないということです。

ア、残りページがわからない。残りページがわからないと、本つてすごく読みにくいんです。たぶん、いろいろな理由がある。

第一の理由は、自分が本のどの部分を読んでいるかによって、言葉の解釈が変わってくることです。

(中略)

同じようなエピソードでも、同じような形容詞でも、それが物語のどの頁ページに出てくるか、前のほうか真ん中あたりか終わりのほうかで、解釈が変わる。そういうことを僕らは自然にやっている。皆さんはたぶん人間は同じ読解力、同じ読解ルールで本を最初から最後まで読み通しているかと思っっているかもしれませんが。違いますよ。実は一頁めくることに僕たちは解釈のしかたを変えている。

本を手に行っているとき、残り頁数は、本を持っているときの掌てのひらが感じる左右の重量差でわかります。あと二〇頁くらい残り頁があると思って、これだと終わる前に、まだもうひと波瀾はらんあるなと思って注意深く読み進み、頁をめくったら、突然「終わり」ということがあります。あと二〇頁あるかと思っっていたうちの二八頁が新刊広告だったから。これはがっかりしますね。階段の途中でいきなり何段か抜けていて、床に転げ落ちたみたいな墜落感がある。あと二〇頁あるつもりで読んでいたのに、不意に終わ

っちゃった。自分でぼんやり予測していた物語の構成がハタンしてしまっわけです。

こういうことを言う人はあまりいませんけれど、読書というのは、「今読みつつある私」と「もう読み終えてしまった私」の共同作業なんです。どれほどストーリーが錯綜して、謎が深まっても、僕たちが忍耐強く推理小説を最後まで読めるのは、最後に名探偵がすべてを解決してくれて、「なるほど、そういうわけだったのか」とトクシンしている。「読み終えた私」を想定しているからです。その「読み終えた私」が保証人になってくれているからこそ、「今読む」ということができる。もし、読み終えてみても、犯人もつかまらず、謎も解かれず、すべてはうやむやのうち……という終わり方もあるかもしれないと思っていいたら、推理小説なんかとても読めません。「読んでいる私」と「読み終えた私」は砂場で両側からトンネルを掘っている二人の子どものようなものです。掘り進めてゆくうちに、だんだん向こうからも掘り進む手が近づいてくるのがわかる。最後の薄い砂の壁が崩れると、手と手が触れあい、風が吹き通る。ああ、ついに出会えたという達成感がある。一冊の本を読み終えるというのは、そういうふうに「私が読み終えるのを待っていた私」ともう一度出会うことなんです。

電子書籍で困るのは、「もう読み終えた私」の居場所がないということなんです。どこで待っていていいのか、わからない。だって残り頁数がわからないんですから。極端に言えば、自分が二頁で終わるショートストーリーを読んでいるか、二〇〇〇頁ある『戦争と平和』みたいな長いものを読んでいるのかわからない。もちろん、デジタル表示で「残り何頁です」ということは見ればわかります。でも、頁数をチェックしながら、あと残り何頁だからそろそろ読み方を変えないといけないとか、そういう面倒なことは僕たちはできないんです。実際には、手に持った本の頁をめくりながら、手触りや重み、掌の上の本のバランスの変化、そういう主、題、的、に、は、意、識、さ、れ、な、い、いに反応しながら、無意識的に自分の読み方を微調整しているんですから。その作業は微細すぎて、読んでいる本人も自分が何をしているのか、気がつかない。

リテラシー^{a)}というのはそういうものなんです。リテラシーというのは、自分では自分が何をしているのかわからないままに行使されている能力なんです。自分がどのようなリテラシーを駆使しているのかわからないから、それはリテラシーなんです。

電子書籍によって紙の本がなくなってしまうという人がいますが、そういうことを言う人は本をあまり読まない人じゃないかと思えます。いや、最新の情報にキャッチアップするために、情報入力のために本を読むことはするけれど、わくわくどきどきしながら時間を忘れて没入するために本を読むという経験があまりない人じゃないかと思えます。

(中略)

僕たちは本を読むときにただ情報を取り入れるためだけに読んでいるわけじゃありません。わくわくしたくて読んでいます。そのわくわく感というのは、ラーメンを食べるときに、つるつる食べ進むにつれて、食欲がしだいに満たされ、最後の一口をぐくりと嚥下^{えんげ}するとき空腹感がびたりと収まるように計画しながら食べるときと同じで、自分で無意識のうちに「ウ」を描いているから得られるものなんです。

すごく面白い本を読んでいるときは、残り頁数が少なくなるとだんだん切なくなりますよね。ああ、この物語の世界に浸ってられるのもあとわずかだと思つと。それつて老いて、死を待つ人間の気分^三にちよつと近いんじゃないでしょうか。自分に残されたわずかな時間を思う存分^四キョウジュしよう。そういう気持ちで、味わい尽くすように最後の一行まで読み、読み終えたときに、「ああ、もう少し読んでいたかったけれど、まあ十分に楽しませてもらったから、これ以上欲は言うまい」というくらいの、ほどよい不満と、ほどよい満足がないまぜになったような状態をめざす。そういうリテラシーが働かないと本を読むことはこれほどの快楽にはならない。

電子書籍のオリジナルアイデアを考えた人はたぶんアメリカの人だと思つんです。アメリカの学生つて、めちゃめちゃなペースで本を読まされるでしょう。大学を舞台にした映画を見ている、「来週までに指定図書^五を五冊読んでこい」とか教授がゲンメイ^六して、学生たちが図書館で必死になつて徹夜で本を読んでいる……というような場面を何度か見た覚えがあります。ああいう本の読み方を電子書籍の発明者はたぶん「読書のデフォルト」だと思つて設計したんじゃないでしょうか。とにかくできるだけ速く、正確に、情報を入力することが喫緊^七の課題であるような場合に用いる機器としては、すばらしく高性能であることは間違いありません。

でも、この設計は、時を忘れて、美食を堪能^⑥するように、かんだり、舐^なめたり、啜^{すす}ったりして、書物から悦樂の限りを引き出すような読み手のこととはたぶん考えていない。そういう本の読み方っていうのは、「暇で暇でしようがない」というような環境でしか許されませんから。何もすることがない雨の日曜の午後とか、友だちが誰も遊びにこない夏休みの昼過ぎとか、雪の降る夜のこたつの中とか、そういう時間が余って余ってしかたがないというなときに、僕たちは書物から最大限の快樂を引き出すべく創意工夫を凝らす。そのような本の読み方を読書のデフォルトにしている人たちもいる。とりあえず、僕はそうです。シリコンバレーには、子どもの頃からそういう本の読み方をしてきたエンジニアはとりあえず多数派ではなかったんじゃないかと思えます。

(内田樹『街場の文体論』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一ずつ選ぶ。

A バイタイ

- ① バイシン員制度
- ③ 所得バイゾウ計画
- ⑤ 株をバイバイする

② レイバイ師を呼ぶ

④ 菌をバイヨウする

20

B ハタン

- ① ハロウ警報
- ③ ハバツの拡大
- ⑤ ハカイと創造

② 全国大会をセイハする

④ 状況をハアクする

21

C トクシン

- ① 撮影カントク
- ③ トクド式
- ⑤ トクメイの投書

② 一般会計とトクベツ会計

④ ショウトク太子

22

D キョウジュ

- ① キョウラク的な性格
- ③ キョウイン免許
- ⑤ キョウド料理

② フキヨウ和音

④ キョウミ本位

23

E ゲンメイ

- ① ゲンカイ突破
- ③ ゲンカクな父親
- ⑤ ゲンリ主義

② ゲンゼイ政策

④ ゲンブ岩質

24

問二 空欄 ア・イ・ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一ずつ選べ。

ア

- ① しかし
- ② または
- ③ だから
- ④ もしくは
- ⑤ なぜなら

25

イ

- ① シグナル
- ② ストーリー
- ③ トピック
- ④ メディア
- ⑤ エピソード

26

ウ

- ① 食欲の計画
- ② 快楽の下絵
- ③ わくわく感
- ④ 満足の状態
- ⑤ 空腹の計画

27

問三 傍線部 (a)・(b)・(c) の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一ずつ選べ。

(a) リテラシー

- ① 面白さ
- ② 読解力
- ③ 物語力
- ④ 情報入力

28

(b) 喫緊

- ① 差し迫って重要なこと
- ② おそろしく大切なこと
- ③ 締切りの決められたこと
- ④ めちゃくちゃで無理なこと

29

(c) 堪能する

- ① よく堪え忍ぶ
- ② 十分に満足する
- ③ 気分を晴らす
- ④ 深くその道に通じている

30

問四 傍線部（一）「読書というのは、『今読みつつある私』と『もう読み終えてしまった私』の共同作業なんです」とあるが、その説明として最も適当なものを①～④の中から一つ選べ。

31

- ① 読書を終えた後の満足感を抱いている自分自身を想定して、読み進めるのが読書であるということ。
- ② 読書を終えた自分自身の立場から、まだ読み終えない自分を振り返って見るのが読書であるということ。
- ③ 読書を終える直前には、すでに読み終えた誰かが迎えてくれると予感する達成感が読書であるということ。
- ④ 読書を終えるまでは読み終えた私は存在せず、読み終えた後にも満足感を得るのが読書であるということ。

問五 傍線部（二）「電子書籍で困るのは、『もう読み終えた私』の居場所がないということだ」とあるが、その説明として最も適当なものを①～④の中から一つ選べ。

32

- ① 残りの頁数が分からないため、いつまで読んでいるべきかチェックするのは不可能であるということ。
- ② 残りの頁数に対応して読み方を変えるような、読書中の無意識的な態度が取れないということ。
- ③ 残りの頁数が分からないことで、いつまでも読み続けているような感覚から抜け出せないということ。
- ④ 残りの頁数に反応して無意識に想定されている、もう読み終えた私に気づくことが出来ないということ。

問六 傍線部(三)「死を待つ人間の気分にとよと近い」とあるが、その説明として最も適当なものを①～④の中から一つ選べ。

33

- ① 物語世界の終わりとともに自分の人生も終わるような、もの悲しい小説の読後感であるということ。
- ② 読書を終えると、物語世界がすべて記憶から失われてしまうので、それは死と同じであるということ。
- ③ 満足な人生を送ったときに感じるような寂しさと満足感が、読み終える自分に共有されるということ。
- ④ すべての情報を味わい尽くすとともに、人間の生命が尽きるほどの満足感にひたれるということ。

問七 傍線部(四)「ああいう本の読み方」とあるが、その説明として最も適当なものを①～④の中から一つ選べ。

34

- ① アメリカの大学生は速読のレベルが高く、情報入力が得意であるということ。
- ② 大学生には教授の命令に従って多くの本を読みこなす力があるということ。
- ③ 大学の授業で求められる、できるだけ素早く正確に情報を読み取る能力のこと。
- ④ すばらしく高性能な機器を利用して、本文を正確かつ迅速に読み取る力のこと。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

35

- ① 電子書籍が紙の本を押しつけて書籍の中心になるというメディアの予想に反して、紙の本の読者は増え続けている。
- ② 推理小説を最後まで読めるのは、名探偵がすべてを解決してくれて安心感をえられることが作者のルールとなっているからだ。
- ③ 電子書籍によって二〇〇〇頁もある小説が、効率的な情報として正確に入力できるようになったのは良いことである。
- ④ 時間が余っている時に一冊の本を味わい尽くすような読書の仕方を、紙の本は可能にさせてくれるのだ。